

潮の香

金子紗来

波打ち際で

朝日を斜め読みする君

昨日書いたセオリーに葉を挟む

空と海の境界線を

双眼鏡を携え渡り歩く君

今日というプロジーグに花束を贈る

結ばれる日々を

握りしめながら海岸線を超える君

永遠という言葉を胸に秘める

あたたかな日差しに

まどろみながら約束を交わす君

肩を寄せ合い刻々と溶け合う

潮の香に誘われ

エピソードに歩み出した君

さらさらと流れる砂時計に耳を傾ける